

S-4 係り結びと疑問詞の量化 —宮古伊良部集落方言の事例から—

衣畑智秀

福岡大学人文学部

tkinuhata@cis.fukuoka-u.ac.jp

1 研究のきっかけ

係り結びと間接疑問文

係り結びと間接疑問の関係についてはじめて言及したのは近藤 (1987) である。近藤 (1987) は古典語に「間接疑問文が存在しない」とした上で、それは「係結びというものがある以上、当然のことである」(p. 273) としている。それでは、日本語の間接疑問文はいつ生まれたのか。この問に対し、高宮 (2005) は、室町時代から江戸時代の資料を調査し、力による間接疑問文は「室町時代の抄物を初出として、以降種々の文献に現れる」(p. 102) と結論付けた。その後、発表者も、室町時代から明治時代の文献を調査して、現代と同じ性質を持つ力による間接疑問文は、江戸時代の後期から現れるとした (Kinuhata 2012)。ここで、「現代と同じ性質」と言うのは、室町時代から江戸時代の力による間接疑問文は、「私は誰が来るか知らない」のように、話し手が疑問節の答えを知らないタイプしか見られなかったのに対し、江戸時代後期には、話し手が答えを知っていると解釈できる例も現れた、という意味であった。

宮古諸方言の調査

近藤 (1987) の「係結びというものがある以上」「間接疑問文が存在しない」という命題の一般性を確かめるために、発表者は 2009 年から宮古諸方言の調査を行った。宮古諸方言には、係り助詞と文末の活用形との形態的呼応はないが、多くの方言で疑問文や平叙文で係り助詞を使い分ける (文タイプとの呼応)。「係り結びがあれば疑問文はない」という命題は、上で見たように、実は疑問の助詞力の分布に関する制約であり、その点で、形態的な呼応がなくても、疑問の助詞を係り結びに使う宮古方言は調査に適していたと言える。

日本語史の調査も踏まえ、この調査では、間接疑問文を調べるために、疑問詞疑問文に対して次の 5 つ (最初は B. を除く 4 つ) の例文を用意していた。すなわち、(1) の A は話し手が答えを知らないものであり、その他はそうとは言い切れないものである。

- (1) A. 私は [誰が掃除したか] 知らない。
- B. おじいは [誰が掃除したか] 知らないらしい。
- C. あなたは [誰が掃除したか] 知っている？
- D. おじいは [誰が掃除したか] 知っている。
- E. 私は [誰が掃除したか] 知っている。

この調査は 2014 年まで続き、疑問専用の係り助詞を持つ宮古本島中南部の諸方言では、その係り助詞は間接疑問節の標識にはならないという結論を得た (衣畑 2016a)。たとえば、本島南部に位置する新里方言では、(2-a) のように疑問詞疑問の係り助詞に *ga* が使われるが、間接疑問は *ga* 自体ではマークできず、(2-b) のように *gara* という形式が使われていた。

- (2) a. ndza=nkai=**ga** iki u-taa=ga?
 どこ=に=ga 行って いた=の?
 b. ba=ja [taa=ga saudzi si-taa=**gara**] ssa-n=juu.
 私=は 誰=が 掃除 し-た=gara しら-ない=よ

係り助詞の交替

しかし、この係り助詞と間接疑問標識の相補分布は絶対的な制約とは言えず、例外もあった。たとえば、伊良部島伊良部では、次のように、可否疑問に用いる係り助詞 *ru* を、間接疑問節の標示に用いているように見える。

- (3) a. pisara=nkai=**ru** icci t-taa?
 平良=に=ru 行って 来た?
 b. abaa [maciri=nkai jarabi-taa ku-di=**ru** ku-n maa=**ru**] sa-n.
 私は 祭り=に 子供-たち. が 来-よう=ru 来-ないつもり=ru 知ら-ない。

このデータをどう解釈すればよいか、それを考えるために、伊良部集落方言の調査データを全体的に見直している時に、(1) の A~E に従って、係り助詞が交替することに気が付いた。そのときに (1) に基づいて得られた用例は、以下のようなものであった。

- (4) A. abaa [**ta=ʔa** sooc=cuba asi=taa]=ra sa-n.
 私は 誰=が 掃除=を し-た=か 知ら-ない。
 B. mma=a [**ta=ʔa** sooc=cuba asi=taa]=ra sa-n.
 おあば=は 誰=が 掃除=を し-た=か 知ら-ない。
 C. ya=a [**ta=ʔa** sooc=cuba asi=taa]=tii=ja sidzi=ru bui?
 あなた=は 誰=が 掃除=を し-た=と=は 知って=ru いる?
 D. kanu sjuu ja-tikaa [**ta=ʔa=du** sooc=cuba asi=taa]=tii=ja sidzi=du bui.
 あの おじい だったら 誰=が=du 掃除=を し-た=と=は 知って=du いる。
 E. abaa [**ta=ʔa=du** sooc=cuba asi=taa]=tii=ja sidzi bui=suga naraasi buf=fa niin.
 私は 誰=が=du 掃除=を し-た=と=は 知っている=けど 教え たく=は ない。

(4) の A、B、C では疑問詞句の後に係り助詞が現れない。これは後に係り助詞 *ga* が [aʔa] の後で消えているのだと分かった。これに対し、D、E では、平叙文に用いられるはずの *du* が疑問詞句に付いて現れている。(4) ではこの他にも、間接疑問節の標識が、A、B で疑問由来の *gara* (/aa/の後で/ga/が脱落して [ra])、C、D、E で引用の *tii* と交替するが、これは他の方言の調査で既に気が付いていた。これに対し、係り助詞の交替に気付いたのはこれが最初であった。

2 現象の検証に用いたデータセット

それまでの係り結びの記述において、係り助詞が文タイプによって使い分けられることは知られていたが(柴田 1976、狩俣 1997、下地 2009)、埋め込み節での交替は報告されていなかったため、上の交替が確実か確かめることにした。検証に当たっては、複数の話者に同じ例文を聞くことも考えたが、伝統方言の習得は世代間の相違が甚しく、個々の話者内での一貫性をまず確かめる必要があるため、少数の話者に絞って行った。

調査に使う例文は、(1) の埋め込み節を以下の5つの疑問詞節に変えたものである。

- (5) a. おばあが**何**を読んでいるか

- b. この車が**どこ**に向かっているか
- c. K さんが**いつ**来るか
- d. 子供たちが**どれ**を頼んだか
- e. おばあが**なぜ**怒っているか

事前の調査において、D、E の時に *du* が使われていた。この D、E は「知っている」という述語が使われているので、主節の主語（＝態度保持者）が疑問詞節の答えに確信を持っている場合である。*du* が平叙文で使われることと合わせて考えれば、補文の内容が一つの命題に決まっているときに *du* が使われるのではないかという予測が立つ。反対に *ga* は主節で疑問文に使われるので、態度保持者が答えを知らない A、B に使われやすいだろうとも予想される。よって、A～E のコンテキストはそのままに、疑問詞節のみ入れ替えて、分布が偶然でないことを確かめることとした。

調査は3名の話者と面接し、調査の意図は知らせず、3回に分けて行った。調査の内容は、日本語で提示した文を方言に直してもらう形である。そのうちの二人の話者（A: 1930 年生男性、B: 1924 年生男性）の結果を示したのが、次の表である。A～E は主文の違い、疑問詞は埋め込み文の違いを表す。一つの刺激文に対して話者が文を複数回発話し、係り助詞が異なっていた場合/に区切って示す。/の左が右よりも多く発話されたことを意味する。また、網掛けは補文標識として *tii* が、網掛けがない部分は *gara* が使われたことを意味する。

表 1 係助詞の分布

	A.	B.	C.	D.	E.		A.	B.	C.	D.	E.
誰が	ϕ	ϕ	ϕ	<i>du</i>	<i>du</i>	誰が	ϕ	ϕ	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
何を	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du/ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	何を	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
どこに	<i>ga</i>	<i>ga/du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	どこに	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
いつ	<i>ga/\phi</i>	<i>du/ga/\phi</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	いつ	<i>ga</i>	<i>ga/du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
どれを	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du/ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	どれを	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>ga/du</i>	<i>du</i>
なぜ	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	<i>du</i>	なぜ	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>ga</i>	<i>du</i>	<i>du</i>
話者 A						話者 B					

以上から、予想通り、D、E では *du* が使われ、A、B には *ga* が使われやすいことが確かめられた。

3 言語研究における位置づけ

結果の解釈

表 1 は大きく二つの観点から読み取ることができる。一つは *ga* の機能として、もう一つは *du* の機能として解釈する方法である。衣畑 (2016b) では、表 1 を *ga* の機能という観点から読み取った。*ga* は主節で疑問文に用いられる。そして直接疑問文では通常話し手は答えを知らない。埋め込み節でも話し手や態度保持者が答えを知らない A、B に *ga* が分布しており、伊良部集落方言の *ga* は「答えを知らない」ことを表していると解釈できる。しかし、他の宮古方言では、主節が A～E のいずれであっても *ga* を用いる方言があり、*ga* の機能には方言差が存在すると論じた。

これに対し、本発表では表 1 を、*du* の機能という観点から考えてみたい。*du* は、主文では平叙文に用いられ疑問詞疑問文に用いると非文法的になる。

(6) a. noo=nu={**ga**/***du**} uti-taa?
 何=が={ga/du} 落ち-た?

b. kincjaku=nu=**du** uti-taa.
 財布=が=du 落ち-た。

ここから、命題が一つに決まっている場合に *du* が用いられると考えることができるだろう ((6-b) は「財布が落ちた」という命題)。(6-a) は、命題(答え)が一つに決まっていなかったために、*du* は使用できない。この直観は埋め込み節で *du* が使われた場合にも拡張できるように思われる。*du* が使われる D、E は、態度保持者の観点からは、命題が一つに決まっている場合だからである。E のパターンを(7) に示すと、話し手はたとえば「財布が落ちた」ということを知っているわけである。

(7) abaa [noo=nu=**du** uti-taa]=tii=ja sidzi=du bui.
 私は 何=が=du 落ち-た=と=は 知って=du いる。

では *du* が現れる節が命題を表すとすれば、この節において疑問詞はどのような役割をしているのだろうか? これは、意味論的な問題である。すなわち、適切な意味論は、(6-a) のように、主節において *noo* (疑問詞) と *du* の組み合わせが非文になり、(7) のように、従属節での *noo* と *du* を組み合わせが非文にならない予測をしなければならない。

解決へのアイデア

du と疑問詞との組み合わせにおいて重要になるのが、補文標識の分布である。もう一度表 1 を見ると、補文標識と係り助詞の分布の関係について、次のことに気づく。すなわち、*ga* は *gara* 節にも *tii* 節にも分布しているが、*du* はほぼ *tii* 節にしか分布しない(1924 年生の話者も同じ)。唯一の例外は**どこに**の行の B 欄であるが、これは C 欄の後に発話され、話者によって *ga* に訂正されたものである。この観察が正しいとすると、*du* と疑問詞との共起は、*tii* による引用節の中でのみ許されるということになる。

ここで、先の考え、すなわち、*du* は命題が一つに決まっていることを表す、を保持すると、(7) において疑問詞 *noo* が使えるのは、*noo* が引用標識によって特殊な解釈を与えられているためだと考えることができる。では「特殊な解釈」とは何か? 発表者は、(7) において、*noo* は、既に決まっている命題の一部を話者が隠すために使用していると考えた。たとえば(4)の E の文脈が示すように、話者はその命題が何かを知っているが、全ての情報を聞き手には伝えたくないのである。

似たような疑問詞の用法は日本語にも見られる。Sudo (2013) は、日本語の疑問詞の重複形(「誰々」「何々」「どこどこ」)が、直接引用にのみ使われることを観察している。

(8) ジョンは **誰々の**バカが来た] と言った。(Sudo 2013)

これも、ジョンが言った命題は決まっているが、それを覚えていないとか、言うのがわずらわしいなどの理由で、一部を隠していると考えられる。Sudo (2013) は、この重複形が純粋な直接引用でしか使えないとしているが、次のように例示でも用いられる。

(9) あの頃は、**誰々**と釣りに行ったり、**どこどこ**のパーティーに出たりと、遊びまくっていた。

だとすると、Sudo (2013) の分析を間接疑問文の分析に応用することもできるのではないか。

Sudo (2013) によると、これら日本語の疑問詞重複形は、個体ではなく、引用によって作られた表現の量化(メタ言語的量化)であると言う。つまり、(8) は、「X という表現があり、「X のバカが来た」と

ジョンは言った」と表現を隠すように解釈される。このアイデアを (7) に応用すると、「X という表現があり、私は「X が落ちた」と知っている」と解釈できよう。

形式化

まず (6-a) から説明したい。(6-a) の LF を以下のように想定する。

$$(10) \text{ [IP}_1 \text{ noo}_8 \text{ [IP}_2 \text{ [IP}_3 \text{ t}_8=\text{nu uti-taa} \text{] } \{ga/du\} \text{]]}$$

ここで、 du は命題を取って命題を返す関数、 ga は命題を取って命題の集合を返す関数とする。すなわち、 du は現れる節が命題であることを意味し、 ga は疑問文を作る役割をしている。

$$(11) \text{ a. } \llbracket du \rrbracket^{M,w,g} = \lambda p. p$$

$$\text{ b. } \llbracket ga \rrbracket^{M,w,g} = \lambda p. \lambda q [q(w) \ \& \ q = p]$$

痕跡 t は変項と解釈されることとし、 du 、 ga が IP_3 を取った結果は次のようになる。

$$(12) \text{ a. } \llbracket du \rrbracket^{M,w,g}(\llbracket t_8 \text{ uti} \rrbracket^{M,w,g}) = \lambda w'. fall(x_8)(w')$$

$$\text{ b. } \llbracket ga \rrbracket^{M,w,g}(\llbracket t_8 \text{ uti} \rrbracket^{M,w,g}) = \lambda q [q(w) \ \& \ q = \lambda w'. fall(x_8)(w')]$$

疑問詞は、Karttunen (1977) に従い、量化の要領で「原疑問文」= (12-b) と組み合わせられるとする。

(13) 疑問詞量化規則

接点 α が、 $\beta \in P_{WH}$ と $\gamma \in P_Q$ からなり、 γ が t_i (i は整数) を含むならば、

$$\llbracket \alpha \rrbracket^{M,w,g} = \{p \mid \llbracket \beta \rrbracket^{M,w,g}(\lambda x_i. [\llbracket \gamma \rrbracket^{M,w,g}(p)])\} \quad (\text{Karttunen 1977})$$

$$(14) \{p \mid \llbracket noo \rrbracket^{M,w,g}(\lambda x_8. [\llbracket t_8 \text{ uti} \rrbracket^{M,w,g}(p)])\}$$

$$= \{p \mid \lambda P. \exists x [P(x)](\lambda y [\lambda q [q(w) \ \& \ q = \lambda w'. fall(y)(w')](p)])\}$$

$$= \{p \mid \exists x [p(w) \ \& \ p = \lambda w'. fall(x)(w')]\}$$

(12-a) は命題であるため、(13) の規則を適用することができず、 du は非文になる。

次に、メタ言語的量化のために「表現」の領域 D_u を定義し、この領域の変項を割り当て Q で解釈する。ただし、タイプ u として解釈されるためには、(本発表の関わる範囲では) 引用標識 tii が必要であるとする。この引用標識を tii_2 とし、補文標識の tii_1 と区別し (cf. Potts 2007)、(15) のように働くものとする。すなわち、 tii_2 は、音韻標示 Φ と統語・意味標示 α からなる言語的対象 $\langle \Phi ; \alpha \rangle$ を取り、音韻標示を D_u の領域の要素として返す。 D_u の要素を「 \lceil 」という表記で示す。

$$(15) \llbracket tii_2 \rrbracket(\langle noo \text{ nu } du \text{ utitaa}; [\llbracket noo' \rrbracket du' \rrbracket uti'] \rangle)$$

$$= \lceil noo \text{ nu } du \text{ utitaa} \rceil : u$$

(15) が si (知る) の項となれるように、命題を取る si_1 の他に、表現を取る si_2 を (16-a) のように定義する。 DOX_y^w は w における y の信念に含まれる世界の集合、 $\text{Cont}(X)$ は表現 X の表す命題を意味する。(16-a) が (15) と態度保持者を取った結果が (16-b) である。

$$(16) \text{ a. } \llbracket si_2 \rrbracket^{M,w,g,Q} = \lambda X_u. \lambda y_e. \exists p [p(w) \ \& \ \text{DOX}_y^w \subseteq p \ \& \ p = \text{Cont}(X)]$$

$$\text{ b. } \llbracket si_2 \rrbracket^{M,w,g,Q}(\lceil noo \text{ nu } du \text{ utitaa} \rceil) =$$

$$\exists p [p(w) \ \& \ \text{DOX}_{spkr}^w \subseteq p \ \& \ p = \text{Cont}(\lceil noo \text{ nu } du \text{ utitaa} \rceil)]$$

表現の中にある疑問詞 noo は、以下の規則によって解釈される。

(17) メタ言語的量化規則

接点 α が $\beta \in P_{WH}$ と $\gamma \in P_t$ からなり、 γ が $t_{<i,u>}$ (整数 i とタイプ u) を含むならば、
$$\llbracket \alpha \rrbracket^{M,w,g,Q} = \llbracket \beta \rrbracket^{M,w,g,Q} (\lambda X_{<i,u>}. [\llbracket \gamma \rrbracket^{M,w,g,Q}])$$

(17) の規則が適用されるために、疑問詞はインデックスされた痕跡を残し移動する。

(18) $[IP_2 \text{ noo}_{<5,u>} [IP_2 \text{ abaa} [VP [CP \ulcorner t_{<5,u>} \text{ nu du utitaa} \urcorner] \text{ sidzi bui}]]]$

noo を表現を束縛する存在量化詞として計算した結果が以下である。

(19)
$$\begin{aligned} & \llbracket \text{noo}_u \rrbracket^{M,w,g,Q} (\lambda Y_{<5,u>}. [\text{abaa } t_{<5,u>} \text{ nu du utitaa } t_{ii} \text{ si}_2])^{M,w,g,Q} \\ &= \lambda P_{ut}. \exists X_u [P(X)] (\lambda Y_u. \exists p[p(w) \ \& \ \text{DOX}_{spkr}^w \subseteq p \ \& \ p = \text{Cont}(\ulcorner Y \text{ nu du utitaa} \urcorner)]) \\ &= \exists X_u \exists p[p(w) \ \& \ \text{DOX}_{spkr}^w \subseteq p \ \& \ p = \text{Cont}(\ulcorner X \text{ nu du utitaa} \urcorner)] \end{aligned}$$

(19) は「表現 X が存在し、「 X nu du utitaa」に対応する命題 p を話し手が知っている」と読める。補文が命題を表すため、*du* が用いられ、*tii* の中でのみ *du* が疑問詞と共起することが予測される。

ちなみに

本発表の提案では、伊良部集落方言の疑問詞は単独で、日本語の疑問詞重複形のような機能を持つことが予測される。詳細な調査は今後の課題だが、伊良部集落方言の疑問詞重複形は複数を表す含意があり (cf. Davis 2016)、単数の場合、次の例に単独の疑問詞を用いることも可能なようである。

(20) $\text{unu yarabya} = a \{ \{ \text{noo noo} / ? \text{noo} \} = \text{yu pussan} \} = \text{tii} = \text{du nacci bu-taa}.$
その 子供=は { 何何/何 }=を ほしい=と 泣いて いた。

参考文献

- Davis, Christopher (2016) “Plurality and distribution in Yaeyaman wh-questions,” in D’Antonio, Sarah, Mary Moroney, and Carol Rose Little eds. *Proceedings of SALT 25*, pp. 636-655, Washington and Ithaca: LSA and CLC Publications.
- Karttunen, Lauri (1977) “Syntax and semantics of questions,” *Linguistics and philosophy*, Vol. 1, pp. 3-44.
- Kinuhata, Tomohide (2012) “Historical Development from Subjective to Objective Meaning: Evidence from the Japanese Question Particle *ka*,” *Journal of pragmatics*, Vol. 44, No. 6-7, pp. 798-814.
- Potts, Christopher (2007) “The dimensions of quotation,” in Barker, Christopher and Pauline Jacobson eds. *Direct Compositionality*, Oxford: Oxford University Press, pp. 405-431.
- Sudo, Yasutada (2013) “Metalinguistic quantification: Evidence from Japanese wh-doublings.” An unpublished manuscript. Paris; Institute Jean Nicod.
- 狩俣繁久 (1997) 「宮古方言」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典セクション 日本列島の言語』, 三省堂, 388-403 頁.
- 衣畑智秀 (2016a) 「係り結びと不定構文—宮古語を中心に—」, 『日本語の研究』, 第 12 巻, 第 1 号, 1-17 頁.
- 衣畑智秀 (2016b) 「南琉球宮古語の疑問詞疑問係り結び—伊良部集落方言を中心に—」, 『言語研究』, 第 149 巻, 19-42 頁.
- 近藤泰弘 (1987) 「古文における疑問表現—「や」と「か」—」, 『国文法講座 3』, 明治書院, 258-277 頁. 『日本語記述文法の理論』に採録.
- 柴田武 (1976) 「沖縄県平良市方言の付属語 *du* および *nu, ga* について」, 佐藤喜代治教授退官記念国語学論集刊行会 (編) 『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』, 桜楓社, 39-60 頁.
- 下地理則 (2009) 「南琉球宮古伊良部島方言の係り結び—共時的な記述」, 『琉球の方言』 33, 法政大学沖縄文化研究所, 87-98 頁.
- 高宮幸乃 (2005) 「格助詞を伴わない力の間接疑問文について」, 『三重大学日本語学文学』 16, 92-104 頁.

付記 本研究は JSPS 科研費 26770153 の助成を受けている。